学苑　No. 905　(19)～(31)（2016・3）

ジャック・ヴァシェの争奪

――「アンドレ・ブルトンなしに，ジャック・ヴァシェは何者であり得たか？」

後　藤　美和子

序

「ブルトンなしに，ジャック・ヴァシェは何者であり得たか？[1]」と詩人ジャック・バロンは1970年に「ナント・レアリテ」誌33号に書いた。「何者でもあり得なかった」という答えを暗に含んだこの問いかけに，ヴァシェのかつての友人の一人が反論したことから，ジャック・ヴァシェ〔1895-1919〕の研究は始まったと言える。本稿はまず，「ヴァシェは私の中でシュルレアリストだ[2]」というアンドレ・ブルトンによる定言からジャック・ヴァシェを引き離そうとする1970年代以降の動きについて考察する。ブルトン以前のヴァシェを知る者たちと，ブルトンの導き手としてのヴァシェにこそ意味を見出す者たち，この双方がヴァシェを争奪している。けれども，取り合いになっているのは一人のヴァシェなのだろうか。この二番目の問いには，ヴァシェが第一次世界大戦動員中に書いた手紙を検討することで答えたい。

1. 発端――1970年「ナント・レアリテ」誌33号

私はジャック・ヴァシェを知っています。ええ！ アンドレ・ブルトンのジャック・ヴァシェを〔…〕[3]。

「ナント・レアリテ」誌33号に掲載されたルース・クーヴィルの署名入りの記事「ジャック・ヴァシェについて」はこのように始まる。まるで彼女がヴァシェの知人であるかのようだが，1919年に23歳で死んだジャック・ヴァシェと1923年生まれで1970年当時ナント市立図書館司書の職にあったクーヴィルが出会っていた筈はない。アンドレ・ブルトンは第一次大戦に従軍中のヴァシェから受け取った手紙に序文をつけ，1919年に『戦場の手紙』として出版した[4]。また，1920年刊行の自動記述による詩作品『磁場』はジャック・ヴァシェの思い出に捧げられた。「侮蔑的告白」〔1924年『失われた足跡』所収〕には，1916年にブルトンがナントの臨時病院にインターンとして配属されていた折に，ふくらはぎを負傷して前線から送られてきたヴァシェと出会ったいきさつ，回復期のヴァシェとのナントでの交友，戦場に戻ったヴァシェと戦時休暇中にパリで数度会ったこと，とりわけアポリネール作『ティレジアスの乳房』が1917年に初演された際の二人の再会，そして終戦後の1919年1月6日にナントのホテル・ド・フランスでヴァシェが阿片を過剰摂取して急死したことが書かれている。ブルトンはヴァシェの死を自殺と考えた。さらにブルトンは1924年の「シュルレアリスム宣言」

1　Jacques Baron, “Nantes et la poésie moderne”, *Nantes Réalité*, n° 33, 1970, pp. 19-20.
2　André Breton, “Manifeste du surréalisme”, *Œuvres complètes, tome I*, Gallimard, 1988, p. 329.
3　Luce Courville, “A propos de Jacques Vaché”, *Nantes Réalité*, n° 33, 1970, pp. 28-29.
4　Jacques Vaché, *Lettres de guerre*, Au Sans Pareil, 1919.

(『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』) に「ヴァシェは私の中でシュルレアリストだ」と書き，1928 年の『ナジャ』，1940 年に『黒いユーモア選集』に収められた「ジャック・ヴァシェ 1895-1919」，1949 年の『戦場の手紙』再版時に新たな序文として加えられた「三十年後」〔1953 年『野を開く鍵』所収〕，「贈与者」及び「森の中でのように」〔ともに 1953 年『野を開く鍵』所収〕において，繰り返しヴァシェについて語る[5]。したがって，先のクーヴィルの記事で，「アンドレ・ブルトンの」という言葉が「ジャック・ヴァシェ」と結びつくのも謂れのないことではない。しかし，このクーヴィルの記事は両義的だ。先ほどの引用は次のように続く。

> でも，あれと全く同じではありません。私のジャック・ヴァシェは，子供たちの緑の楽園からまっすぐに出てきました。彼は赤毛に近い髪の可愛らしい少年でした。ロリアン[6]のインド河岸通りに沿って輪回しをして遊び，家に帰ると，ナントに住む親友であり，神秘的な乙女座のもと，ほぼ同じ日に生まれた従兄弟でもある少年[7]に，いつ終わるとも知れない長い手紙を書きました[8]。〔下線強調は本稿著者による〕

さらに証言はヴァシェの父方の祖母が英国人であること，ヴァシェがナント高校[9]でジャン・サルマン[10]と同級だったこと，ラグビー部に入り，ボクシングと徒競走をし，イタリア・ルネサンスをテーマにオペラを書きたいと望んだこと，夏をポルニシェ[11]のリブレール海岸で過ごしたこと，英国製のスタイルで女性にもてていたこと，第一次大戦中にシャンパーニュ地方で負傷した後，病院でも看護婦に取り巻かれていたことを語る。クーヴィルが誰からこうした話を聞いたのかは，ここには書かれていない。「ナント・レアリテ」誌 33 号はヴァシェの研究の出発点となる。この号の発行は，「アンドレ・ブルトンの」という形容のつくジャック・ヴァシェとは別の，ブルトンが出会う以前のヴァシェを忘却の淵から蘇えらせるきっかけとなった。とりわけ，同号に掲載されたジャック・バロンの「ナントと近代詩」[12] という記事が問題提起となった。記事はブルトンの『ナジャ』からの次の引用で始まる。

> ナント，それだけの価値のある何かが，そこから私のもとへ訪れるように思える場所，いくつかの視線がたくさんの火で自ら燃え上がる場所，生のリズムが他と違って私に感じられる場所，あらゆる冒険を越えた一つの冒険が何人かの人々に住み着いている場所……。

バロンは 1905 年にパリに生まれたが，一族はナントの出身で，バロンも少年期をナントで過ごし

---

5 André Breton, “Les Champs magnétiques”, “La Confession dédaigneuse”, “Nadja”, *Œuvres complètes, tome* Ⅰ, Gallimard, 1988. André Breton, “Jacques Vaché, 1895-1919”, *Œuvres complètes, tome* Ⅱ, Gallimard, 1992. André Breton, “Trente ans après, “Le donateur”, “Comme dans un bois”, *Œuvres complètes, tome* Ⅲ, Gallimard, 1999.

6 ロリアンはブルターニュ地方の大西洋に面した港町。ジャック・ヴァシェは 1895 年 9 月 7 日にロリアンで生まれ，1919 年 1 月 6 日にナントで 23 歳で没した。

7 ヴァシェの従兄弟ロベール・ギバル（Robert W. Guibal）は 1895 年に生まれ，1988 年に没した。

8 Luce Courville, *op. cit.*

9 現クレマンソー高校。

10 ジャン・サルマンは劇作家，舞台俳優。本名はジャン・ガストン・ベルメールで，1897 年 1 月 13 日にナントで生まれ，1976 年 3 月 26 日にブーローニュ・ビランクールで没した。

11 ポルニシェはナントに近い大西洋に面した町。

12 Jacques Baron, “Nantes et la poésie moderne”, *op. cit.*

ている[13]。ジャック・バロンが1969年に出した回想録『シュルレアリスムの一年目』には，バロンが「アヴァンチュール」誌第1号に載せた詩[14]をブルトンが気に入り，パリのドランブル通りのホテルに会いに来るようブルトンから手紙を受け取ったこと，バロンが学校の休みを利用してブルトンを訪ね，話をしながら二人でパリの町を長々と散歩したことが書かれている。この本によれば，ブルトンはバロンがナント出身であることに驚き，「あなたはナントの人なのですか？　こうした偶然の一致は，いつもながらに全く不思議なものですね。ナントは私が特別な愛情を抱いている町です」と言ったという。そしてブルトンは1916年にナントの病院で医師補[15]をしていたとバロンに説明し，「そこで私はジャック・ヴァシェと知り合いました。私の生涯で最も驚くべき出会いの一つです。彼は私の知っている中で，最も自由な人間，最も大胆で，最も侮蔑的な精神の持ち主の一人です。私が文学とその不純な魅力から距離を置くことができたのは，大部分が彼のおかげなのです。バンジャマン・ペレもナントの出身です…。ナントにはプロセ公園がありますが，あそこは私にとって，最も情感に満ちた場所の一つです」と語ったと書かれている。さらに回想録には「ブルトンは友人ジャック・ヴァシェを賞賛し，オ・サン・パレイユ社から出たばかりの『戦場の手紙』をできるだけ早く読むようにと言った」とあり[16]，初対面の時からすでに，ブルトンが当時16歳だった少年バロンにヴァシェへのイニシエーションを施していたことが分かる。バロンは「新・文学」誌，「シュルレアリスム革命」誌に参加するが[17]，1929年に「マルクス主義雑誌」の創刊に携わり，次第にブルトンと対立を深める。そして，1929年の『シュルレアリスム第二宣言』でブルトンから浴びせられた非難に対し，1930年の弾劾パンフレット「死骸」で，「彼〔ブルトン〕は死んだ。もう彼について語るまい。彼は自分が立てた泥の奔流に溺れて死んだのだ」と書いて決別する[18]。

けれども『ナジャ』の文章は，バロンが引用を終えたすぐ後に「今でもそこから友人たちが私に会いに来るかもしれない場所，ナント，そこで私は一つの公園を愛した，プロセ公園を[19]」と続く。バロンが「ナント・レアリテ」誌にこの記事を寄せた1970年には，すでにブルトンは没している[20]。決別から40年の時を経て，バロンは記事を『ナジャ』の引用から書き始めることで，ナントからブルトンに会いに来た友人たちの一人としての位置に，再び自らを置くことを許したのかもしれない。そしてバロンはブルトンの「侮蔑的告白」から，「彼〔ヴァシェ〕なしでは，私はおそらく一人の詩人[21]

13　ジャック・バロンは1905年2月21日にパリで生まれ，1986年3月30日にパリで没した。バロンの伝記的要素については，Patrice Allain et Gabriel Parnet, “Je suis né… Jacques Baron, repères biographiques”, *Jacques Baron, l'enfant perdu du surréalisme*, Dilecta, 2009, pp. 15-54. を参照した。

14　「アヴァンチュール」誌第1号〔1921年〕に掲載されたバロンの詩は「祭り（Fête）」と「けん玉（Bilboquet）」の二編で，いずれも1924年刊行の第一詩集『詩の流儀（L'allure poétique）』に収められた。

15　バロンの回想とは異なり，実際はインターンであった。ブルトンが医師補の資格を取るのは1919年である。

16　Jacques Baron, *L'an 1 du surréalisme suivi de l'an dernier*, Denoël, 1969, pp. 13-27.

17　「新・文学」誌は1922年から1924年まで，「シュルレアリスム革命」誌は1924年から1929年まで続いた。

18　Patrice Allain et Gabriel Parnet, *op. cit.*, p 28.

19　André Breton, “Nadja”, *op. cit.*, p. 661.

20　アンドレ・ブルトンは1896年2月19日にノルマンディー地方のタンシュブレーで生まれ，1966年9月28日にパリで没した。

21　ここでは poète となっているが，ヴァシェは h を足して詩人を pohète と綴り，当時のブルトンを手紙でそう呼んだ。

となっていたことだろう。天職といった，何かばかげたものを認めさせようとする暗い力の陰謀を，彼は私の中で打ち砕いてくれた〔下線強調は本稿著者による〕」と引用した後で，これと対になる言葉で，次の問題提起をしたのだ。

> ブルトンなしに，ジャック・ヴァシェは何者であり得たか？　外から見た限り，彼は地方に住む奇人であり，クレビヨン通り[22]の「きざな若者」であり，自殺することで家族の名誉を汚す喜びを見出したのだ。けれども友人が彼の『戦場の手紙』を出版したおかげで，彼は奇妙な具合に文学の中に入り込んだ。ここで言う文学とは冷め切った明晰さであり，空虚を作り出す変わった機械だった。この空虚の中に，ブルトンは痙攣的美を据えることになるのだが，痙攣的美とは石の夢に閉じこめられた彫像ではなく，近代詩の女呪術師である。「ヴァシェは私の中でシュルレアリストだ」とブルトンは明言する[23]。

文章はさらに「二人〔ブルトンとヴァシェ〕の出会いの場がナントであったことには意味がある」と続き，ジュール・ヴェルヌ，ロンサール，デュ・ベリー，バンジャマン・ペレ，そしてグザヴィエ・フォルヌレを見出したシャルル・モンスレ，画家のピエール・ロワ，映画監督のジャック・ドゥミ，ジュリアン・グラックの例を挙げながら，ナントの町の精神的特性を地理的，歴史的な観点から解説する。ヴァシェの名はもはや現れず，「ブルトンなしに，ジャック・ヴァシェは何者であり得たか？」という問いは，答える価値もないかのように置きざりにされる。

2. 展開――ポール・ペランからの手紙

けれども「ナント・レアリテ」誌 33 号の刊行後に思いがけない出来事が起き，バロンはヴァシェに関する新たな記事「ジャック・ヴァシェについての情報」を，翌 1971 年 4 月発行の「クーピュール」誌 6 号に書くことになる。出だしは次のとおりである。

> ブルトンのジャック・ヴァシェと，ナントの学友たちのジャック・ヴァシェの間には明らかな開きがある。後者は『戦場の手紙』のことを知っていても，大して関心を払わない。〔中略〕アンドレ・ブルトン以前のジャック・ヴァシェという名の人物が存在し，知られ始めている。これほど長く待たなければならなかった[24]とは奇妙なことだ[25]。

そしてバロンは「ナント・レアリテ」誌 33 号の記事を読んだペランという医学博士から手紙を受け取ったことを語る。

> 医学博士のポール・ペラン氏はジャン・サルマンと同様，ヴァシェも参加し，幾分自由思想に取りつかれていたナントの学生グループの最後の生き残りだ。ペラン氏は友人ヴァシェについて心温まる思い出を持っ

22　クレビヨン通りはナントにある通りの名。

23　Jacques Baron, “Nantes et la poésie moderne”, *op. cit.*

24　実はすでに 1927 年に，マルク・アドルフ・ゲガンは「リーニュ・ド・クール」誌に「ジャック・ヴァシェ」と題する文を載せ，ブルトン以前のヴァシェについて回想している。ゲガンは本稿で後述するナントの高校生グループとその雑誌「カナール・ソヴァージュ」についても書いているが，ヴァシェが雑誌に参加していたかどうかは覚えていないとしている。
Marc Adolphe Guégan, “Jacques Vaché”, *La Ligne de cœur*, n° 4, janvier 1927, pp. 34-43.

25　Jacques Baron, “des nouvelles de Jacques Vaché”, *Coupure*, n° 6, avirl 1971, p 3.

ており，ヴァシェを「真に」その時代の中に位置づけることのできる数少ない一人だ。先に引用した「ナント・レアリテ」誌について，彼は私に一通の手紙を書いて寄こしたのであるが，多くの理由からそこには関係資料に加えるだけの価値がある[26]。

バロンはペランの手記を要約して紹介する。

1912年-1913年，ジャック〔・ヴァシェ〕は高校生グループに参加する。私〔ペラン〕は友人ポール・セールに誘われてグループに入っていた。グループにはジャン・ベルメール（ジャン・サルマン）の他，ピエール・ビセリエ[27]とウジェーヌ・ユブレ[28]がおり，文学への共通の関心が彼らを結びつけていた。〔中略〕グループはこんにゃく版印刷で最初の雑誌を出すが，創刊号だけで終わった。なぜなら，反軍国主義を賞賛する一つの記事が周囲の怒りを買ったからだ。〔中略〕我々はくじけることなく，別の雑誌を出した。「さあ行こう」誌は経済的理由で4号までしか続かなかった[29]。そこには，セール，ユブレ，ジャック・ヴァシェ（筆名はジャック・ドー）の詩が載り，さらに連載小説形式でジャン・サルマンの小説『ナントのジャン・ジャック』[30] の第一稿が掲載された。この小説は植物園での会合を呼び起こし，分かる人には分かるようにグループの何人かを描いていた。私はこれらの雑誌を大事にとっておいたのだが，残念ながら見つけることができなかった。（『ナントのジャン・ジャック』も見つからない。）1912年からジャック・ヴァシェが文学活動をしていたことは明らかだ[31]。

このペランのバロン宛書簡〔1970年6月14日付〕の文面はジャン＝ルイ・リテールの記事「ジャック・ヴァシェの足跡をたどる，偶然に，忠実に」の中で明らかにされ[32]，「〈ブルトンなしに，ジャック・ヴァシェは何者であり得たか？　彼は地方に住む奇人であり，“きざな若者”であり（…）〉というあなたの主張には全く同意できません。全くもって疑わしい話です」と書かれていたことが分かっている。けれども非難の意図をもってであれ，こうしてペランからバロンへ連絡があったことが幸いし，第一次大戦前夜の忘れられていた文学グループについての資料が発掘され始める。「クーピュール」誌6号の表紙を飾ったヴァシェの肖像写真も，ペランからバロンに提供されたものだ。バロンによれば，ペランはこの写真とヴァシェの死とを結びつけ，次のように書いていた。

いずれにせよ，遺書がなくとも，自殺説の有利になるような事実がある。「ナント・レアリテ」誌に載った写真では，少し突き出した顎と挑発的な眼差しといったジャックの特徴的な表情が分からないので，私は自分の持っている写真を探した。最も適当な写真は私の記憶帳からはがすことができなかった。それは動員

---

26 *Ibid.*

27 ピエール・ビセリエは1896年5月24日にアルジェで生まれ，1926年頃に自殺あるいは事故によって命を落とすが，その死についての詳細はいまだに分かっていない。

28 ウジェーヌ・ユブレは1896年5月17日にナントに隣接する町ショレで生まれ，1916年10月27日に第一次大戦のソンムの戦いにて20歳で戦死した。

29 「カナール・ソヴァージュ」誌の間違い。「さあ行こう」誌は最初の雑誌の名である。また「さあ行こう」誌は正しくは「さあ行こう，悪集団よ（En route, mauvaise troupe）」誌で，創刊は1913年2月である。

30 Jean Sarment, *Jean Jacques de Nantes*, Librairie Plon, 1922.

31 Jacques Baron, “des nouvelles de Jacques Vaché”, *op. cit.*

32 Jean-Louis Liters, “Dans les pas de Jacques Vaché. Par hasard et fidélité”, *Jacques Baron, l'enfant perdu du surréalisme*, *op. cit.*, pp. 55-73.

中のジャックともう一人の友人と私が写っているものだ[33]。それとは別の，はがすことのできた一枚をあなたにお送りする。ジャックが1915年にくれたものだ。ジャックが軍服姿でないから，多分1913年のものだろう。気がかりな事実というのは次のことだ。写真は穴だらけで，ジャックは私にそれを渡しながら，カービン銃での射撃の的に使ったこれ以外になくて失敬と謝ったのだ！ 無意識的な自己破壊の傾向がすでに現われていたのだろうか？[34]

こうして貴重な情報を提供したペランであったが，彼は問題の雑誌を手元に残していなかった。バロンは「クーピュール」誌の記事「ジャック・ヴァシェについての情報」を次のように締めくくる。

これがジャック・ヴァシェについての最新情報だ。「さあ行こう」誌を見つけることは今のところできていない。この雑誌の4つの号[35]はどこに隠されているのだろう[36]。

ポール・ペランの息子ジャン＝ポール・ペランは，1994年にナント市で開かれた「夢の街，ナントとシュルレアリスム」展のカタログに記事を寄せ，父の思い出を語るとともに，父ペランがバロン宛書簡で「私の記憶帳」と呼んだものを写真入りで紹介している[37]。それを見ると，原稿はタイプ打ちされており，カービン銃による射撃の的となったヴァシェの例の写真が余白に貼り直されている。息子によれば，父ペランはこの回想録を自分の子どもたちのために1960年代に書き始め，ヴァシェとの出会いの箇所は1967年に書かれたものだという。バロンの記事のもととなったこのオリジナル版手記には，ジャン・サルマンとヴァシェについて次のように書かれている。

私は同じように文学好きの友人たちに近づいた。それは友人セールのせいであり，彼が私をあの仲間たちからなる小グループに誘い入れたのだ。そのうちの二人はかなりの名声を博すことになる。とりわけジャン・ベルメールの場合がそうで，彼はジャン・サルマンの名で演劇界において真の成功を収めた。炎の髪を持つジャック・ヴァシェについては，早すぎた死がその才能の開花を妨げたが，今だにかなりしばしば言及される。シュルレアリスムの父アンドレ・ブルトンが，ジャック・ヴァシェとの出会いが自分にとって決定的だったと明言したからだ[38]。

手記が書かれた1967年はブルトンの死の翌年である。この手記から，ブルトンがヴァシェに関してどう述べていたかをペランが知っていたことが分かる。その上でペランは「ブルトンなし」のヴァシェが何者だったかをバロンに示そうとしたのだ。

---

33 もう一人の友人の名はフランソワ・シャイユーである。ヴァシェはヌヴェールの病院から父親に出した1915年9月26日付手紙で，榴弾でふくらはぎを負傷したことを伝えているが，同じくヌヴェールから母親に宛てた10月9日付手紙の中で，シャイユーの第64部隊がほぼ壊滅し，シャイユーも行方不明になっていると書いている。Jacques Vaché, *Soixante-dix-neuf lettres de guerre*, réunies et présentées par Georges Sebbag, Jean-Michel Place, 1989.

34 Jacques Baron, “des nouvelles de Jacques Vaché”, *op. cit.*

35 4つの号とあるが，「さあ行こう」誌は創刊号のみで廃刊。4号まで続いたのは「カナール・ソヴァージュ」誌である。

36 Jacques Baron, “des nouvelles de Jacques Vaché”, *op. cit.*

37 Jean-Paul Perrin, “Docteur Paul Perrin, Ami de Jacques Vaché”, *Le rêve d’une ville, Nantes et le surréalisme*, Musées des Beaux-Arts de Nantes et Bibliothèque municipale de Nantes, 1994, pp. 207-213.

38 *Ibid.*

3. 探索と発見――書店主ミシェル・ベランジェとジャック・バロン

ペランがバロンに手紙を書いた1970年6月14日から，バロンの記事「ジャック・ヴァシェについての情報」が1971年4月発行の「クーピュール」誌6号に掲載されるまでに起こった事を整理してみよう。ペランから手紙を受け取ったバロンはさっそく行動に出た。1970年8月11日，彼はまずルイ・アラゴンに以下のような手紙を書く。

親愛なるルイ

君にとって辛い時期に[39]騒がせて申し訳ない。けれども，話そのものも面白いし，ジャック・ヴァシェを知っていた人はもう君しかいないのだから，君に話さないわけにはいかないのだ。一ヶ月前にナントの医学博士ポール・ペラン氏から，高校時代のヴァシェと彼の友人グループについてのとても興味深い情報を受け取った。このグループはナントで「さあ行こう」という題のアナーキスト的傾向の雑誌を出したのだ。ブルトンからこの話を聞いた覚えはない。いずれにせよ，この資料（それと奇妙な写真を一枚）をどうしたらいいか，君の判断を仰ぎたい。僕は今パリにいて，ひと月滞在する。そのあと9月15日頃ナントに行って，ペラン氏に会うつもりだ。敬具　ジャック・バロン[40]

これにアラゴンがどう返信したかは明らかでないが，ジャン・ルイ・リテールの前掲書の註によれば，バロンは8月15日にオーギュスト・ベランジェに手紙を書く。アラゴンに手紙を書いたわずか四日後だ。オーギュスト・ベランジェはナントのボン・パストゥール広場の書店主であり，バロンはベランジェに資料の探索を依頼したらしい。さらにバロンは，「ナント・レアリテ」誌33号にヴァシェについての記事を書いたナント市立図書館司書ルース・クーヴィルに，図書館の地方資料を収める書庫内に「さあ行こう」誌がないかどうか見て欲しいと頼む。10月22日，ペランが手紙でベランジェをジャン・サルマンに紹介する。そして1970年12月にベランジェはパリでサルマンと会い，たくさんの情報と貴重な資料をサルマンから受け取ったのである[41]。

1971年4月の「クーピュール」誌6号のバロンの記事では，「さあ行こう」誌と「カナール・ソヴァージュ」誌の二つが混同されているし，雑誌そのものもまだ見つかっていないと書かれていた。書店主ベランジュが1970年末にジャン・サルマンから入手した資料には，雑誌そのものは含まれていなかったのだろうか。それとも情報をすぐにバロンに伝えなかったのだろうか。ジャン・ルイ・リテールの前掲記事によれば，バロンとベランジェはヴァシェとシュルレアリスムについての展覧会を1970年秋に開くことを，手紙で相談していた。けれどもバロンは時期尚早と考えていたようで，1971年初めに二人は関係を断つことになる[42]。かつてブルトンと深い親交を持ち，いわばブルトンの側に立ってヴァシェを考察するバロンと，サルマンと直接会い，ナント・グループの資料をその手から受け取ったベランジェとの間に温度差が生じるのは当然だろう。

ところで，ここに二つの新聞記事がある[43]。一つは1971年2月19日付「ル・モンド」紙で，フラ

39　アラゴンの伴侶エルザ・トリオレが1970年6月16日に73歳で没している。
40　Jean-Louis Liters, *op. cit.*
41　*Ibid.*
42　*Ibid.*
43　マルグリット・ボネ著『アンドレ・ブルトン，シュルレアリスムの冒険の誕生』の註に記された新聞名と日付けをもとに，本稿著者は二つの記事をマイクロ・フィルムで閲覧・調査した。
Marguerite Bonnet, *André Breton, Naissance de l'aventure surréaliste*, Librairie José Corti, 1988, pp. 87-88.

ンソワ・ボットの署名入り記事「ジャック・ヴァシェ，黒い大天使」[44] が掲載されている。全体の三分の二程はブルトンの「侮蔑的告白」を焼き直したような内容であるが，「彼〔ヴァシェ〕は人と親しくするのを望まなかった」というジャン・サルマンの証言を挙げ，「さあ行こう」誌，「カナール・ソヴァージュ」誌にヴァシェがジャック・ドー，トリスタン・イラーの筆名で詩や短篇小説を寄稿したことを報じた上で，「ジャン・サルマンとヴァシェは第一次大戦前夜にナントで一つのグループを作ったが，それはシュルレアリスム運動を先駆けるものだった」と書いている。けれどもここで最も重要なのは，ヴァシェの書いた散文詩「二人の恋人たちが明るい通りを歩いていた」が同頁に掲載されたことだ。紙上には未発表とあり，出典が記されていないが，このヴァシェの詩は 1913 年 1 月 8 日の日付入りで，第一の雑誌「さあ行こう」に掲載されたものである。この詩は同雑誌にのみ発表され，いまだ草稿も見つかっていないことから，「ル・モンド」紙がこれを「さあ行こう」誌から転載した可能性が高い。すると，「さあ行こう」誌は，1971 年 2 月 19 日の段階ですでに見つかっていたことになる。

もう一つは 1971 年 4 月 9 日付「フィガロ」紙で，ここにはジャン・プラストーの署名で「シュルレアリスムの第一法王は本当にアンドレ・ブルトンだろうか」[45] という記事が載っている。プラストーは次のように書き始める。

> シュルレアリスム及びアンドレ・ブルトンの伝記の研究に興味を持つ人なら誰でも，次のことに同意するだろう。すなわちある一人の男が詩人〔ブルトン〕に大きな影響を与えたということに。彼の名はジャック・ヴァシェで，黒いユーモアの提唱者だ。けれども，彼は本当は誰だったのだろう。人々は実は彼のことを，噂以上にはほとんど知っていなかった。けれども，ナントのある書店主が神秘のヴェールの一端をめくりあげた。私ジャン・プラストーは彼の証言を求めると共に，ヴァシェの同時代人で生存しているわずかな親族，学友たちの声を聞きに行った。彼らの思い出から，非常に変わった人物の肖像が明らかになる[46]。

プラストーはヴァシェの従兄弟に会って話を聞く。「フィガロ」紙に掲載されたその内容は「ナント・レアリテ」誌にルース・クーヴィルが書いたものと一致するため，クーヴィルが記事で明かさなかった証言の主がヴァシェの従兄弟だったことが判明する。プラストーはペランにも会いに行き，次の話を引き出す。

> 彼〔ヴァシェ〕からはほとんど手紙を受け取っていません。私〔ペラン〕はそれらをとっておきませんでした。ありふれた手紙でしたから。オスカー・ワイルドと同じく，最も注目に値するのは彼の会話でした。あの声の響きを記録しておく録音機があればよかったのに。家族以外でヴァシェと親しくした者たち，とりわけ彼のことを悪ふざけが好きで話術に長けた人物だと思った者たちは，彼の多大な感化を受け，いまだにある意味彼を崇拝しています。魅了されたのはブルトン一人ではありません[47]。

プラストーはベランジェの書店からジャン・サルマンの『ナントのジャン・ジャック』が見つかったことを次のように語る。

---

44 François Bott, “Jacques Vaché, L’archange noir”, *Le Monde* du 19 février 1971.
45 Jean Prasteau, “Le premier Pape du Surréalisme fut-il bien André Breton?”, *Le Figaro* du 9 avril 1971.
46 *Ibid.*
47 *Ibid.*

ロワールの文学者たちによく知られたベランジェ氏の店の古い棚には，1922年にプロン社から出たきり忘れられていたジャン・サルマンの小説『ナントのジャン・ジャック』が眠っていた。この作品は入手不可能となっており，シュルレアリスムの始まりに関する重要な情報を含んでいるとは誰も想像できなかった。実はジャン・サルマンはヴァシェのグループの一員で，この本の中で，彼はともに過ごした青春の冒険を語っていたのだ[48]。

また，ベランジェはプラストーのインタヴューに答え，「さあ行こう」誌が引き起こしたスキャンダルを報じる当時の新聞を発見したことを「1912年，1913年の新聞を綿密に調べなくてはなりませんでした。ついに私は見つけました。私は事件を見つけたのです，大事件を…」と興奮ぎみに語る。そして，「さあ行こう」誌の反軍的・アナーキズム的性質を，ピエール・リヴォーの記事[49]とウジェーヌ・ユブレの詩[50]を引用しながら説明した後，問題の雑誌の所在について次のように述べている。

ジャン・サルマンはそれらを今でも読むことができます。というのも，彼はそうした雑誌の残部をまだ所有しているからです[51]。

一方，ベランジェと袂を分かったジャック・バロンは，1972年にナント美術館でマックス・エルンスト展が開催され，ナント市が「シュルレアリスム週間」と題するイベント週間を開くと，これに積極的に関与する[52]。彼は催しに合わせて「ジャック・ヴァシェへのオマージュ」[53] という戯曲を書く。登場人物はブルトン＝語り手，ジャック・ヴァシェ，無言の少女の三人である。ブルトン＝語り手の台詞は1919年版『戦場の手紙』の序文と「侮蔑的告白」から引用され，ヴァシェの台詞も『戦場の手紙』の引用から構成されている。無言の少女とは，戦時休暇中のヴァシェが1917年6月24日の『ティレジアスの乳房』初演の前夜にパリ・リヨン駅近くで二人の暴漢から保護し，二日間を共にした少女ジャンヌであり[54]，彼女の台詞はない。したがって，この劇にはペランから得た新情報は全く反映されていない。また，バロンは「シュルレアリスム週間」について，「文化の家」会報に「シュルレアリスムの周囲に」と題する記事を書くが，ジャン・サルマンの名は記されたものの，サルマンが属したナントの高校生グループについてはここでも触れられていない。

ペランとサルマンから得た新情報を踏まえた展覧会をベランジェが開くのは，やっと1977年5月になってからである。サルマンが1976年3月に死去し，その自伝的小説『カヴァルカドゥール』[55]が死後出版されるのを機に，ベランジェが自らの書店で開催したのだ[56]。『カヴァルカドゥール』は

---

48 *Ibid.*

49 ピエール・リヴォーは1896年にロシュフォール近郊で生まれ，1967年に没した。ここに引用されたのは，「さあ行こう」誌に掲載された記事「アナーキー」の一部である。

50 ここに引用されたユブレの詩は，「さあ行こう」誌（1913年2月）の翌1914年3月に作られた自由思想的な作品「仲間たちみんなへ」の一部である。この詩は第二の雑誌「カナール・ソヴァージュ」，第三の雑誌「サールたちの言ったこと」にも掲載されていない。

51 Jean Prasteau, *op. cit.*

52 Jean-Louis Liters, *op. cit.*

53 Jacques Baron, “Hommage à Jacques Vaché”, *Jacques Baron, l’enfant perdu du surréalisme*, *op. cit.*, pp. 97-101.

54 この出来事については，本稿著者による「アンドレ・ブルトン〈侮蔑的告白〉について――1917年6月24日，ジャック・ヴァシェとの再会のエピソード」（「学苑」2013年3月第869号）を参照されたい。

55 Jean Sarment, *Cavalcadour*, Jean-Claude Simoën, 1977.

56 Jean-Louis Liters, *op. cit.*

ナント・グループの思い出に多くのページを割いており，ヴァシェはそこにジャック・ブヴィエという名で登場する。サルマンが「カナール・ソヴァージュ」誌に連載し，1922年にプロン社から出版した小説『ナントのジャン・ジャック』にも，ヴァシェはアンゴという名で登場する。

さらに5年後の1982年，アラン＆オデット・ヴィルモーが『クラヴァン，ヴァシェ，リゴー』[57]を発表する。彼らは補遺として「ブルトン以前のヴァシェ」と題する章を置き，ナントの高校生グループについて解説するとともに，「さあ行こう」誌と「カナール・ソヴァージュ」誌に載ったヴァシェの詩作品5編，「カナール・ソヴァージュ」誌の表紙，ヴァシェからテオドール・フランケル宛の書簡の原稿，ヴァシェの描いたスケッチ類，ヴァシェの短篇小説「ジル」，「カナール・ソヴァージュ」誌にヴァシェが書いた書評，ヴァシェから友人に宛てた手紙2通の抜粋を掲載した。2通の手紙の宛先がサルマンであることは現在では公になっているが，アラン＆オデット・ヴィルモーのこの著書においては「ある友人への2通の手紙の抜粋」となっており，サルマンの名は伏されている。同書の中で，アラン＆オデット・ヴィルモーは「カナール・ソヴァージュ」誌の復刻版がミシェル・カラスーの監修のもと，ジャン・ミシェル・プラス社からまもなく出版されることを告げる。さらに，第三の雑誌「サールたちの言ったこと」についても，それが雑誌というよりはむしろ文章を集めたものであるとした上で，共に復刻されると書いている。「サールたちの言ったこと」について言及したものとしては，これが最初である。

ミシェル・カラスーの『ジャック・ヴァシェとナント・グループ』[58] は1986年に出版され，そこにはナントの高校生グループの作った雑誌が三つとも収録された。アラン＆オデット・ヴィルモーは「サールたちの言ったこと」誌にはヴァシェは参加していないと書き[59]，ミシェル・カラスーは前掲書で，ヴァシェは第一次世界大戦の勃発〔フランスにおける総動員令は1914年8月1日〕をイギリス滞在中に知り，ブレストで動員〔1914年12月15日〕されるまでイギリスにいたと記している[60]。けれども本稿著者は，ヴァシェがこの三番目の雑誌に関与したのではないかと考える。その理由は，1914年10月14日にグループの中心人物の一人ウジェーヌ・ユブレがジャン・サルマンに宛てた手紙に，次のような一節があるからだ。

> ところで，ヴァシェが企画している饗宴にはぜひ参加したい。サールやミームの名に値する者たち，「分かっている者たち」に再会するのは楽しみだし，僕たちの良き過去の時期を再び生きるのもいいだろうね。ヴァシェにそう伝えてくれ[61]。

ユブレの書簡のこの箇所は，これまで研究者たちから見落とされてきた。続くユブレの手紙はこの饗宴が実際に開かれたことを伝えるが，ヴァシェが出席したかどうかは書かれていない。「サールたちが酒に酔った日」の章には，先の手紙の書かれた直後の1914年10月23日の日付がついており，ヴァシェが企画したとされる饗宴との関係が推測される。この「サールたちの言ったこと」誌につい

---

57 Alain et Odette Virmaux, *Cravan Vaché Rigaut*, Rougerie, 1982, pp. 149-179.

58 Michel Carassou, *Jacques Vaché et le groupe de Nantes*, Jean-Michel Place, 1986.

59 Alain et Odette Virmaux, *op. cit.*, p. 150.

60 Michel Carassou, *op. cit.*, p. 204.

61 “Correspondance Hugène Hublet”, *Jean Sarment, corréspondances à l'aube du surréalisme*, la nouvelle revue nantaise n° 4, 2004, pp. 43-95.

ては，次の論稿で詳しく扱う予定である。

ナント市は1994年に「夢の街，ナントとシュルレアリスム」展，2009年－2010年に「さあ行こう，悪集団よ――ナントとプレ・シュルレアリスム」展を開き，ナントをシュルレアリスム発祥の地，あるいはシュルレアリスム先駆の町として位置づけ，そのことを内外に広めようとしている。サルマンが1976年に没した後，彼が所有していた原稿，書籍，ナント・グループについての資料は全て，娘のジャクリーヌ・サルマン女史によって，2002年と2009年の二度に分けてナント市メディアテック・ジャック・ドゥミに寄贈された[62]。

4. ジャック・ヴァシェの変容

こうして「ブルトンなしに，ジャック・ヴァシェは何者であり得たか？」というバロンの言葉に反駁する形で，ブルトン以前のヴァシェの資料は次第に増えていった。一方で，ジャン・シュステルは「『戦場の手紙』に付け加えられたヴァシェの家族宛の手紙，カラスーとセバックの掘り起こした資料，〔ヴァシェの〕従兄弟ギバルとラブーダンの出会い[63]，誰が作ったか忘れたが，何年か前にテレビ放映されたナントについての映画，私にとってこれらは全て別の人，ブルトンの枠外にいるジャック・ヴァシェという名の人物，すなわち，同姓同名の意味のない人物に関わるものだ」[64] と書き，「ブルトンなし」のヴァシェを拒絶する。ここではブルトン以前のヴァシェとブルトン以降のヴァシェが二人いて，同時には開けることのできない右目と左目のように存在している。けれども，そもそもブルトンと出会う以前と以降，ブルトンの枠外と枠内という区切り方は正しいのだろうか。アンドレ・ブルトンはジャック・ヴァシェについての情報収集に乗り気であった。ヴァシェの年の離れた実妹マリー・ルイーズ[65]に宛てた1949年9月28日付のブルトンの手紙がそれを証明している。ブルトンはマリー・ルイーズに対し，『戦場の手紙』の再版を出版社が彼女に送っていなかったことを詫び，『半世紀のシュルレアリスム年鑑』と『黒いユーモア選集』で使うヴァシェの写真について相談する。また，ヴァシェの描いた水彩画を見つけて欲しいと述べ，ヴァシェをモデルにした彫像を探す件では，ヴァシェの親類のギバル夫人の名を引き合いに出している[66]。そしてブルトンはマリー・ルイーズにこう書いた。

> ジャック・ヴァシェに関わるあらゆることが，私や私の友人たちにはとても意味があるということを，どうか忘れないでください。彼に関するあらゆる種類の資料が，情熱を込めて待たれています。彼についての思い出をまとめるのを，どうして承諾してくださらないのですか。それらを出版するために何でもお手伝い

---

62 ナント市メディアテック・ジャック・ドゥミの歴史資料室にジャン・サルマン・コレクションとして整理されたそれらの資料を，本稿著者は2010年，2013年春，2014年夏に閲覧・調査して写真に収めた。ジャック・ヴァシェの原稿とヴァシェおよびユブレのサルマン宛書簡もそこに含まれる。

63 ドミニク・ラブーダンは1974年にギバルを訪問して話を聞き，「ブルトン以前のヴァシェ，ロベール・W・ギバルとの出会い」として発表した。Dominique Raboudin, “ Vaché avant Breton, Rencontre avec Robert W. Guibal”, *Le rêve d'une ville*, *Nantes et le surréalisme*, *op. cit.*, pp. 183-186.

64 Jean Schuster, “A propos de Nantes, considérations strictement personnelles”, *Le rêve d'une ville, Nantes et le surréalisme*, *op. cit.*, pp. 186-187.

65 マリー・ルイーズ・ヴァシェは1916年5月19日に生まれ，2013年に97歳で没した。

66 Jacques Vaché, *Soixante-dix-neuf lettres de guerre*, *op. cit.*

しますのに[67]。

一方で，1951 年にサルマンが戯曲「我々は三人だった」を雑誌に発表し，「若き日の三人の友人たち，ウジェーヌ・ユブレ，ピエール・ビセリエ，ジャック・ヴァシェの思い出に」と記したにもかかわらず[68]，ブルトンとサルマンの間の書簡は発見されず，二人がヴァシェについての思い出を共有した事実は見つからない。それは，サルマンの使った「思い出」という言葉とブルトンがマリー・ルイーズへの手紙で使ったそれとでは意味合いが異なり，ブルトンが欲していたのはヴァシェに関する客観的な証言や資料だったからだろう。けれどもそのこととは別に，先に引用した「ヴァシェに魅了されていたのはブルトンばかりではありません」というペランの言葉にもかかわらず，グループのかつての仲間たちとブルトンがヴァシェについての「思い出」を共有できなかったのは，ヴァシェ本人に変化があったせいではないだろうか。もしもそうならば，その変容はいつ起きたのだろう。

ここで一通の手紙が問題になる。1915 年 8 月 21 日，「死体の塹壕」と呼ばれるシャンパーニュ地方の前線に出撃する前夜にヴァシェがサルマンに宛てて書いた，次の遺書のような手紙がそれである。

> 絶望しないでくれ，ジャン，僕は生き延びる，気も狂わずに，生き延びるつもりだ――何故なら――痛ましくも――多くの人々が心を殺されて戻って来るから――いずれにせよ，小競り合いが終わったら，僕は君に手紙を書く――あるいは誰かが書くだろうよ――僕がそこに居続けることになったら，君に預けておいたものを整理してくれ――好きに焼いてしまって構わない――君に任せる，僕がするのと同じことを，君がやってくれると分かっているから――[69]

この手紙はナント市メディアテック・ジャック・ドゥミの歴史資料室がジャン・サルマン・コレクションとして所蔵しており，本稿著者が閲覧・調査したところ，罫のない紙に青紫色の色鉛筆で書かれている。筆跡は非常に丁寧で，1915 年 9 月の負傷のすぐ後に病院から出されたサルマン宛の手紙や，『戦場の手紙』のもととなった 1916 年以降のブルトン宛の手紙とは，別人が書いたかと思えるほどに筆跡が変わっている。丸みを帯びた癖のあるブロック体の後者に対し，このサルマン宛の手紙は恐らくは塹壕で書かれたものであるにもかかわらず，かつて彼がサルマンとの共同出版を目指し，二人の短篇作品を清書した[70]時と同様の美しい字体となっている。この手紙で，彼は「死ぬ」という言葉を意識的に二度避けている。「あるいは誰かが書くだろうよ」というのは，自分が死んだことを誰かが告げる訃報のことであるし，「もしも僕がそこに居続けなければならなくなったら」というのは，戦死して，死体としてそこに放置される厳しい現実を言っているのだ。また，同じ手紙の中で，これから向かう「死体の塹壕」で兵士の 70% が死ぬだろうと予想を立てていながら，敢えて「小競り合い」という言葉を使っている。現実を見つめつつ，言葉にする際にそれを矮小化する手法はヴァシェの文章に特徴的である。

彼はこの手紙の中で，死ぬことばかりでなく，「心を殺される」ことを恐れている。同じことを 1918 年 11 月 14 日付ブルトン宛手紙では，「僕はもう限界だ…それに奴らは警戒している…奴らは何

---

67 *Ibid.*

68 Jean Sarment, “Nous étions trois”, *Œuvres libres*, 1951.

69 “Correspondance Jacques vaché”, *Jean Sarment, corréspondances à l’aube du surréalisme*, *op. cit.*, pp. 96-98.

70 原稿はナント市の同メディアテック所蔵。Les Solennels の題で 2007 年に Dilecta 社から刊行。

かを疑っている――僕を支配している間に，奴らが僕の頭を空っぽにしなければいいが[71]」と書き，「頭を空っぽにする」という言葉で表している。アラン＆オデット・ヴィルモーは「心を殺される」ということに関し，「我々は少し，それこそが実際に起きたことなのではないかと考えてしまう」とやや遠まわしな言い方で書き，「シャンパーニュ地方の戦いでは負傷しただけだったが，第一のヴァシェは生き残らなかった。そこから戻ったのは別の男であり，その男がやがてブルトンと会うことになるのだ」と結論する[72]。けれども，ヴァシェは「心を殺された」のだろうか。むしろ反対に，ヴァシェは心を殺されないように守ったのだと本稿著者は考える。そして，その防御の方法が，彼の提唱することになる「ユーモア[73]」だったのではないだろうか。1917 年 4 月 29 日にヴァシェはブルトンに宛てて，「(…) ユーモアはあまりに一つの感覚に由来しているから，説明するのがとても難しい――僕はそれは一つの感覚だと思う――もう少しで一つの知覚だと言いそうになった――あらゆるものの，演劇的で（喜びのない）無用さを感じる知覚だと[74]」と書き送ることになる。ヴァシェは戦争の中で新たな知覚を獲得した。それはまさに，生き延びて行くための変身だった。

ブルトンの『ナジャ』は「私とは誰か？〔私は誰を追っているのか？〕[75]」という問いで始まるが，ブルトンはヴァシェに「ユーモア」の定義を求め，彼を「追う」。ヴァシェはブルトンに「追われて」いることに気づいており，死の半月前，1918 年 12 月 19 日付のブルトン宛としては最後となる手紙の中で，「僕にどうしろというんだ？[76]」と書く。ブルトンに「追われ」，ブルトンの求めに応じて自らの独特な「ユーモア」を定義したことで，「ユーモア」はヴァシェにおいて顕在化し，ヴァシェの変容を加速させていくのである。

（ごとう　みわこ　　総合教育センター）

71　Jacques Vaché, *Lettres de guerre, op. cit.*, p. 25.
72　Alain et Odette Virmaux, *op. cit.*, pp. 152-153.
73　ヴァシェは humour から h を取り，ユーモアを umour と綴った。
74　Jacques Vaché, *Lettres de guerre, op. cit.*, p. 9.
75　André Breton, “Nadja”, *op. cit.*, p. 647.　原文の Qui suis-je はこのように二通りに読むことができる。
76　Jacques Vaché, *Lettres de guerre, op. cit.*, p. 26.